

Mitsuru Kuramoto



第十号  
TOKYO 010  
PAPER  
for Culture

トーキョーペーパー

フカー カルチャー



Yuko Nakamura



Shuichiro Sakaguchi

祭りは、ふいにやってくる

倉本美津留 (放送作家)  
坂口修一郎 (ミュージシャン)  
中村佑子 (映像作家)

研究テーマ⑩  
開幕！新時代の祝祭

アツカン通信：  
大巻伸嗣 (現代美術家)

あっという間にその日はやってきた。体内の細胞がざわめいている。喜びも哀しみも全部くるんで、“今ここ”でそのすべてを味わい尽くすハレの日だ。どんな気持ちで、向かおうか。あの人もこの人も、きっと会えるに違いない。遠くからはじまりの音が聴こえてきた。駆け足でその音を追いかける。そこで出会った景色は、きっとこの先も忘れることはないだろう。飲んで、食べて、歌い、踊る。ああ、私は還ってきたんだ。祭りという名の、いのちの躍動、いのちの弔い。

The day was upon me before I knew it. Every cell in my body stirred. An auspicious day for tasting joy and sadness and all the rest, *right here, right now*. In what mood shall I approach it? I am sure to see this person and that person. The sound of the beginning drifts in from far away, and I chase after it at a run, toward scenes sure to be unforgettable. Drink, eat, sing, dance — and so I come full circle. In the name of festival, it is the dynamism of life, the mourning of life.

2015 SEPTEMBER  
TENTH ISSUE  
010  
---

東京の文化を研究する  
フリーペーパー







# りは、ふいにやってくる

## Festivals Can Sneak Up on You



青い海と木々の緑のコントラストが鮮やかな東京、夢の島公園。  
今号の客員研究員、倉本美津留さん（放送作家）、坂口修一郎さん（ミュージシャン）、  
中村佑子さん（映像作家）は、真夏の太陽を背に受けながら、公園を散策しつつ、  
東京ゲートブリッジでは東京湾、そして都心を臨みました。

Yumenoshima Park in Tokyo is a place of brilliant contrasts between the blue of the sea and the green of the trees. With the summer sun on their backs, this issue's guest researchers Mitsuru Kuramoto (broadcast writer), Shuichiro Sakaguchi (musician), and Yuko Nakamura (visual artist) strolled through the park, stopping at Tokyo Gate Bridge for a view of Tokyo Bay and the city.

中村佑子

映像作家

Yuko Nakamura

倉本美津留

放送作家

Mitsuru Kuramoto

坂口修一郎

ミュージシャン

Shuichiro Sakaguchi

めでたくも10号目に突入した『TOKYO PAPER for Culture』。ささやかながら祝祭気分を持ちつつ挑んだ巻頭鼎談のテーマは、東京の祝祭。会話を進めるにつれ、この鼎談もまた、ひとつの祭りであったとお三方が教えてくれました。

### 祭りがはじまるその瞬間

倉本美津留（以下倉本）：そもそも笑って「わっ!今、なんで自分はこんなことで笑っちゃったの」っていう、少しの驚きが大切だと思うから、それを増やすこと、要は笑いの視点を増やすためにはどうしたらいいのかっていうことをずっと考えながら仕事しています。で、それこそ笑いは祭りに例えやすい。言うなればお笑い芸人は祭りの中心にいるシャーマン

マンみたいな存在なんです。僕はそのシャーマンに渡す器を作る立場で、いつもどんな器を渡したら、今まで見たことのない祭りを巻き起こしてくれるんだろうっていうことをずっと考えていて。

中村佑子（以下中村）：私はバラエティ番組を作る機会はまだないのですが、確かに番組を作ることは、お祭り感覚がありますね。自分がこれまで作った番組でも、みんなで「わーっ!」と神輿を担いでいるような一体感を感じる瞬間があります。

倉本：そうそう。「何ちゅう神輿の担ぎ方してんねん!こんな担ぎ方、見たことないわ!」っていうことをどれだけ発明できるか。要は「こんな祭り、あり?」みたいなこと考えて、僕は祭りの概念をひとつずつ増やしていきたいんですよね。

中村：『三宅裕司のワークパラダイス』（※1）。私は倉本さんが企画されていたあの番組がすごく好きで、いつもげらげら笑っていたんですけど、そのあとの余韻というのが、阿波踊りを踊ったあとみたいな気分になっていました。

倉本：それはうれしいなあ。中村さんのなかに祭りが巻き起こったわけやね。祭りってそもそもは1対1の関係性から巻き起こるものだとも思う。個人のなかに渦巻いているものが火花を散らして、周りを刺激してどんどん伝染してって、そのなかには「なんでこんなことするのか、全然わからへん」っていう人もいるんだけど、それでも気づいた頃には「そ

ういうことだったのか!すごいものができてもうてた!」っていう感じというか（笑）。

坂口修一郎（以下坂口）：今のおふたりの話を伺っていたら、思い出しました、僕の忘れられない祭り。僕は過去にジェーン・バーキンと一緒にバンドをやらせていただいたことがあったんですけど、

倉本：えっ!あのジェーン・バーキンと?

坂口：東日本大震災（2011年）があった直後、彼女はチャリティーコンサートをするために、来日したんです。そのコンサートと一緒にバンドを組んだんですよ。

中村：それはすごすご縁ですね。

坂口：彼女は当時のフランスからでは日本の状況もわからないため、マネージャーもミュージシャンも誰一人として引き連れることなく、単身で来日することを決めていたんです。だから、日本のミュージシャンとステージに立つことを希望していて、そのとき錚々たるミュージシャンに声がかかったと思うんですよ。でも震災直後のことでしたし、みなさんお忙しいしで色々難しい事情があったと思うんです。で、そういうなかで僕にも声がかかって。

倉本：あの頃、自粛の精神でみんなお見合い状態になっていましたね。こういうときこそ逆なんじゃないかと思っていましたけど。

坂口：僕もそう思って「できることを考えます」ってお答えしたんですよ。そうしたら30分後ぐらいに電

祭りの体質ってある?

Are certain people predisposed to like festivals?





話がかかってきて「坂口さん、お願いします。でき  
って言いましたよね?」って……。そこで僕は「しま  
った!!」と。

倉本:「言うてもうた!」と(笑)。

坂口: はい(笑)。でも「やる」って言った限りはもう、  
そこから4日間、みんなでほぼ徹夜で準備して。

倉本: その一瞬、後悔にかられながらも不安ととも  
に進んでいく感じ、わかるなあ。まさにいい祭りにな  
る予兆やね(笑)。

坂口: それで迎えた本番のステージでなんと彼女は  
「ワールドツアーの話があるけど、このバンドを誘  
拐して連れて行きたい」って、これまたおしゃれなこ  
とを観客の前で言ったんです。

倉本: めちゃくちゃ面白い祭りじゃないですか。

坂口: 彼女がフランスに帰ってから1週間後ぐら  
いにまた電話がかかってきて、「ワールドツアーあり  
ますけど、あのときに行くって言いましたよね」って  
(笑)。それで本当にツアーをまわることになりまし  
た、世界中を。“ジェーン・バンド”の一員として。

中村: 祭りのはじまりって、案外と不意打ちから入  
ってくるものかもしれないですね。

倉本: 大きな祭りほど本当にそう。でもそれを何  
かのチャンスとして捉えられるかどうかですよね。

中村: 私自身、新作の映画で美術家の内藤礼さん  
を2年間撮り続けていたのですが、一度、撮影途  
中で内藤さん自身に撮られることを拒否されてしま  
ったことがあったんです。作品を制作している自分  
の姿をカメラで追われることの危うさを内藤さんに  
指摘されて。それで私は立ち止まってしまったん  
です。でも、私の目の前にはすでに始まってしまっ  
ている“何か”がある。「(映画を作ることは) 続けて  
ください」。最終的には内藤さんのその言葉に背中  
を押してもらったんですけど、それ以降の私はその  
“何か”に必死についていくような感覚で撮影して

## 自分にとって 最高の祭りとは?

What is your best festival?

いたんです。

倉本: 映画を拝見しましたが、祭りのメンバーがど  
んどん集まってくるような作品でしたね。

中村: それはとてもうれしいお言葉です! でも本当  
にそうで、走っている電車があったとしたら駅に停  
車する度に人が乗ってくるような感覚を持ちながら  
撮っていました。そして人がひとり乗る度に何かが  
ひらいていく感覚というか匂いがある。その瞬間  
を怖がらず「よしきた」って捉えていく作業とい  
うか。そうやって撮り続けました。

倉本: 中村さんも坂口さんも完全に祭り体質(笑)。

坂口: いや、倉本さんこそ一番の祭り体質(笑)。

### 共犯関係を結びたい

倉本: 『ユーロビジョン・ソング・コンテスト』って  
知っています? 欧州で年に一度行われる歌の祭典  
で、40か国以上の参加国からそれぞれ選ばれたア  
ーティストの1位を決める番組なんですけど、僕は  
この祭りのシステムがとても優れているなって思っ  
てるんです。

中村: どういうシステムなんですか?

倉本: コンテストの様子は、全参加国のテレビ局で

生中継されています。視聴者の数は1億人以上とも  
言われていて、そういうなかで各国代表のアーティ  
ストが自前の歌を生で披露する。そしてそれを審査  
するのが各国のテレビ局なんですけど、それが投  
票制なんです。投票は自国ではなく、必ず他国に  
投票しないといけない。つまり自分の国以外の優  
秀なアーティストに投票するシステムなんです。こ  
れ、すごく平等だと思いませんか? 日本でもいろ  
んな場面で取り入れるべきやと僕は思ったんです  
よね。

中村: 47都道府県ある日本でも色々できそう。

倉本: そうなんです。で、このコンテスト、欧州  
ではすごく有名な番組なのに、日本では全然知ら  
れていない。だから、伝えねば! と思って、コンテ  
ストの取材に行ったことがあったんですけど、実  
際に行ってみると想像以上にすごいスケール感で  
。コンテスト会場は前年度の優勝国と決まってい  
て、その年はスウェーデンだったんですけど、あの  
ノーベル賞の授賞式を行っている場所がコンテ  
スト会場でした。この体験は僕のなかですごく大  
きかったなあ。そもそも事前にちゃんとアポが取  
れていなくて、なんとかギリギリ会場に入れて、参  
加した各国のアーティストに日本語で「応援して  
ね」っていうコメントを即興で歌ってもらったり  
して、自分もとにかくお祭り状態やった(笑)。お  
ふたりは好きな祭りありますか?

坂口: 僕、鹿児島出身なんですけど、地元で7  
月に行われる六月灯<sup>ろっかっどー</sup>という祭りが子供の頃  
から好きで。この祭りは県内の神社や寺院でそれ  
ぞれ決められた日程のなかで行われるんですが、  
街の人たちが和紙に絵や文字を描いて、それを灯  
籠の木枠に貼り付けて、お寺に奉納するんです。  
するとお寺がその灯籠に灯を入れて、境内に飾  
るんですが、それ以外に大きな出し物はないん  
です。でも毎年すごい数の人がその祭りに集ま  
ってくるんですよ。「何が楽しかったんだろう?」  
って、今振り返ってみてもちょっと不思議な気持  
ちにもなるんですけど、でもそんな僕が今、六  
月灯のような祭りの中心のないフェスティバル  
を地元で行っているんです。

中村: どんなフェスティバルなんですか?

坂口: 『グッドネイバース・ジャンボリー』とい  
うフェ





スティバルです。今年で6回目（8月22日に開催）を迎えたんですが、このフェス、ヘッドライナーはいるものの基本的にはフラットなフェスで、それぞれ自分にできることの持ち寄りパーティーなんです。例えば木を削って器を作る人がいたら器のワークショップをやってもら。そうやって参加者全員が自分事として関わっていける祭りを目指しているんです。六月灯もきっとそんな祭りだったから僕は好きだったんだろうなあと。

**中村：**私にはそこまで深い祭り体験はないからちょっとうらやましいです。でも、そんな私がひとつ挙げるとするなら、東京音頭でしょうか。祭りというか、盆踊りですね。私は両親ともに東京生まれ、東京育ちの江戸っ子なんです。東京音頭、ずっと踊っていても絶対に飽きないんです。不思議ですよ。あとはフジロックフェスティバル。フジロックが楽しいのは、音楽との1対1の対話がまずあって、その集合体があつた場に広がっているからなんじゃないかなあと。

**坂口：**僕、フジロックには過去に何度か出演させていただいているんですが、一度レッド・ホット・チリ・ペッパーズが出演している裏で、僕ら（ダブル・フェイス）が演奏したときがあつて。そのときはお客さんにもすごい感謝の気持ちが湧いてきました。「レッチリではなく、よくこの場所に残ってくれましたね」って（笑）。そのとき僕らと観客の間には、共犯関係みたいなものが生まれていて。それがまた気持ち良いんです。

**倉本：**それすごくわかるなあ。まさに笑いもそう。共犯関係、祭りにはすごく大切。

**中村：**同じ感覚を持った人たちが同じ空間を共有すること。これはすごく人が根源的に求めていることですよ。その流れでいうと、私、東京には公共の広場がすごく少ないなあってずっと思っていて。例えばふらりとデモに参加しようとしても、警察に陣列を細切れにされますし、ようやく会場に集まったとしても、そこで一体感を持つまでには至らない。これが例えばフランスなら、みんなビール片手にハンバーガーを食べながら、シャンゼリゼ通りを練り歩く。それって一瞬の非日常でもあり、個人が群衆の一部になったときに、何かすごい力を持つということを感じる瞬間でもあると思うんですね。日本ではあまりそういう力を皮膚で感じる瞬間がない気がし

て。広場はそういう役割を担ってくれる場所だと思っているんです。

**坂口：**欧州はギリシャのアゴラ（※2）がルーツになって広場がある。日本は戦後、民主主義を確立したときから公園を作っていましたけど、アゴラのような広場は作られなかったですね。

**倉本：**この課題は結局、広場も含めたいろんな場所

ここから先の未来に

手にしたいものとは？

What are your hopes for the future?

In keeping with the celebratory mood about reaching the tenth issue of TOKYO PAPER for Culture, our opening roundtable this time focuses on Tokyo's festivals. As the conversation moves along, our three guests show us that the roundtable itself is a kind of festival.

### The Moment a Festival Begins

**Mitsuru Kuramoto:** What's important with comedy is that there be a little bit of a sense of surprise, like, "Hey, why did that make me laugh?" so in my work I'm always thinking about how to generate more of those moments, how to bring in a humorous perspective. It's also easy to compare comedy to festivals. In a way, a comedian is a lot like the shaman at the center of a festival. I'm in the position of making containers to give the shaman so I'm always thinking about what kind of containers I can come up with to stir up a festival that's unlike anything ever seen before.

**Yuko Nakamura:** I've never had the chance to work on a variety show myself but I agree: putting together a program has much the same feel as putting on a festival. In the programs I've worked on so far there have always been moments when it felt like everyone was pulling together, shouting in unison and carrying a *mikoshi* portable shrine.

**Kuramoto:** Yes, that's it. The question is how often you can get people to think, "Wow, look at the way they shoulder that *mikoshi*. I've never seen anything like it!" In short, I want to question the very nature of what makes a festival, and expand the concept as much as I can, one new festival at a time.

**Nakamura:** I really loved that program you produced called *Miyake Yuji no waku paradaisu* [Yuji Miyake's Work Paradise]. It always cracked me up and left me feeling the same way I felt after dancing at the Awa Odori festival.

**Kuramoto:** That's wonderful to hear. So the show triggered a festival in your heart? You know, I think festivals derive from one-on-one interactions, like there's something whirling around inside somebody that suddenly starts sending our sparks and firing up everyone in the area and then the infection spreads and even though there might be some people who say, "I don't understand what everyone is doing," before you know it they're going, "Now I get it. This is awesome!" (laughs) **Shuichiro Sakaguchi:** Listening to the two of you right now reminded me of an unforgettable festival I took part in once.

でどれだけ出会い祭りができるかということだと思うんです。だから5年後に迫る東京オリンピックでも、今、開会式や閉会式なんかで今までにないことをやろうとみんなでがんばっていると思うんですけど、僕はもっとその外側のこと、人の営みそのものに目を向けた方が良いと思っています。

**中村：**この雑多な東京という街のなかで、自分のエアポケットのような広場、場所を見つけたい。

**坂口：**見つけたいし、作りたいですね。

**倉本：**この5年の間に、何かひとつでも考えて祭っていきたいですね。今日のこの出会い祭りもひとつのきっかけにしてね。

※1 三宅裕司が様々な職業の人をゲスト（実際は生瀬勝久ひとりが演じている）に招き、仕事にまつわるトークを交わす深夜バラエティ。1999年10月～2000年3月まで日本テレビ系列で放送。

※2 人の集まる場所を意味し、古代ギリシャでは市民の集会や談論・裁判・交易などの場であった。  
参考文献：ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典

I was in a band with Jane Birkin and....

**Kuramoto:** Wait, the Jane Birkin? You really get around! (laughs)

**Sakaguchi:** She came to Japan right after the Great East Japan Earthquake (2011) to do a charity concert. I got to be part of her band.

**Nakamura:** What an amazing opportunity.

**Sakaguchi:** She decided to come to Japan all by herself, without a manager or any musicians of her own, despite inadequate information available in France at that time. She wanted to share the stage with Japanese musicians and I'm pretty sure a lot of big names were contacted about taking part. This was right after the earthquake, though, and I guess people were preoccupied or faced other challenges that made it difficult to participate. Anyway, eventually I got the call.

**Kuramoto:** Back then everyone was worried about exercising self-restraint, trying to gauge other people's feeling. For my part, I thought "self-restraint" was exactly the wrong direction for people to be moving in.

**Sakaguchi:** I thought so, too, and said I would think about what I could do. About thirty minutes later the phone rang and she said, "Sakaguchi-san, you did say you would do it, right?" I realized it was too late to back out.

**Kuramoto:** You were stuck! (laughs)

**Sakaguchi:** Yep. (laughs) But I'd said I would do it so we spent the next four days getting ready on hardly any sleep at all.

**Kuramoto:** I know that moment of feeling, "Uh oh" and then pushing ahead anyway despite the uncertainty. That's the sign of an awesome festival waiting to happen. (laughs)

**Sakaguchi:** When it came time to perform, Jane was talking to the audience and said, "I've got a world tour coming up and I think I'll have to kidnap this band and take them with me." It was such a cool thing to say.

**Kuramoto:** Sounds like a really fantastic festival.

**Sakaguchi:** About a week after she went back to France my phone rang again and on the other end she said, "You know, I'm going to hold you to your promise about the world tour." (laughs) And so I really went around the world as member of "Jane's Band."

**Nakamura:** Sometimes the start of a festival really takes you by surprise.

**Kuramoto:** The bigger the festival the more I think that's true. What's important is whether you can see such things as opportunities or not.



**Nakamura:** I spent two years shooting the artist Rei Naito for my latest film and at one point she refused to let me capture her on film. She sensed the danger of being followed around by a camera while creating her own work. This stopped me in my tracks, but something was happening right before my eyes. Ultimately, she told me to continue making the film, giving me a little push, but after that I was always filming with the sense of desperately chasing after that “something.”

**Kuramoto:** I saw the film and thought it had the feel of all the members of a festival gathering together.

**Nakamura:** Well, that’s a nice thing to say! And you know, you’re right. Making that film felt like being on a train where every time it pulled into a station more and more people would get on. There was this sensation in the air like every time someone new would climb on board it would open up some new possibility. I felt like my job was to keep from being scared and to keep filming as if each moment was the one I’d been waiting for.

**Kuramoto:** You and Sakaguchi both seem to have the right disposition for festivals. (laughs)

**Sakaguchi:** No, you’re the one who’s built for festivals! (laughs)

Building the Relationship of Partners in Crime

**Kuramoto:** Are you familiar with the Eurovision Song Contest? It’s a festival of song held once a year in Europe, a program where artists selected from more than forty countries compete to be number one. I think the system the festival uses is really outstanding.

**Nakamura:** How so?

**Kuramoto:** The contest is broadcast live on TV stations in all the participating countries. Viewership is said to reach over a hundred million, and artists representing each country give their original performances. The TV stations in each country evaluate the performances based on a vote, and the votes have to be cast for another country rather than one’s own. The system, then, requires casting a vote for some outstanding artist from another country. Doesn’t that sound fair? I think this system should be put to use in Japan, too.

**Nakamura:** With 47 prefectures in Japan, I’ll bet there are a lot of things that could be done.

**Kuramoto:** That’s right. And despite how famous this program is in Europe, it’s almost completely unknown in Japan. Hoping to introduce it in this country, I went to report on the contest and found it to be even bigger than I had imagined. The contest always takes place in the country that won the year before, and when I went it was being held in Sweden — at the same venue as the awarding of the Nobel Prize. It was really an incredible experience. I hadn’t gotten any proper appointments in advance but I could get in at the last minute and improvised and managed to record all the contestants saying *Oen shite ne* (“cheer for me”) in Japanese — it was like being part of the festival myself. (laughs) What are your favorite festivals?

**Sakaguchi:** I’m from Kagoshima and when I was a boy I really

loved the local Roggaddo festival held every July. The festival takes place on different days at different shrines and temples around the prefecture. Townspeople draw pictures or words on pieces of washi paper and paste them to the wooden frames of lanterns, which are then presented to the temples. These are illuminated and displayed on the grounds of the temples, and that’s really all there is to it, but the festival draws incredible numbers of people every year. Looking back and trying to remember what was so much fun I have to admit it does seem a bit strange now, but then here I am involved in organizing a festival back home that’s every bit as decentralized as Roggaddo.

**Nakamura:** What kind of festival is it?

**Sakaguchi:** It’s called the Good Neighbors Jamboree. This year (August 22) was the sixth edition. We do have headliners but it’s basically a pretty flat festival with everyone coming together in a kind of big party to show what they can do. Someone who knows how to make bowls out of wood, for example, might hold a bowl-making workshop. The idea is to create a festival where everyone involved takes ownership over the event. I suppose I liked the Roggaddo so much because it was that kind of festival.

**Nakamura:** I’ve never had that kind of festival experience so I suppose I’m rather envious. But if I had to name one event I guess it would be the Tokyo Ondo, though maybe this is not so much a festival as a kind of Bon Odori dance. Like both of my parents, I was born and raised in Tokyo so I could dance the Tokyo Ondo all day and never get tired of it. Strange, huh? I also like the Fuji Rock Festival. What’s great about Fuji Rock, I think, is that there’s a one-to-one dialogue with the music, but it’s happening *en masse* all over the place.

**Sakaguchi:** I’ve played at Fuji Rock a few times; once my band Double Famous even played right behind the Red Hot Chili Peppers. You could really feel the love from the audience — the ones who stayed to listen to us instead of going off to hear the Chili Peppers. (laughs) There was this sense that we were all partners in crime, and that felt pretty good.

**Kuramoto:** I know what you mean. It’s the same with comedy. That feeling of complicity is really important for festivals, too.

**Nakamura:** That feeling of sharing the same space with people who feel the same way — I think this is something people really crave in a fundamental way. I’ve always felt Tokyo doesn’t have enough public plazas. If you want to take part in a public demonstration, for example, the police can easily break up the formations, and when you do finally manage to reach an open space it isn’t enough to create that feeling of oneness. In France, everyone marches down the Champs-Élysées with a beer in one hand and a burger in the other. Such things are a kind of momentary escape from the everyday but that moment of becoming an individual who is also part of a huge crowd can be incredibly empowering. There don’t seem to be many opportunities to feel this sort of thing in a visceral way in Japan, but I think that’s one of the functions plazas serve.

**Sakaguchi:** In Europe the plaza has roots in the Greek agora. Japan built a lot of parks as it democratized after the war, but



not so many agora-like plazas.

**Kuramoto:** I think the issue here is really how many people you can meet and how many festivals you can hold in all sorts of places, whether plaza or not. With the Tokyo Olympics just five years away, I’m sure everyone is working their hardest to ensure that the Opening and the Closing Ceremonies and all the rest are like nothing anyone’s ever seen before, but I hope people will also look to the periphery, too, to the business of everyday living.

**Nakamura:** In a city as mixed-up as Tokyo, we need to find plazas and places that can function like air pockets.

**Sakaguchi:** Find them, and create them, too.

**Kuramoto:** In the next five years I hope we can think of something, and some new kind of festival. Who knows, maybe today’s meeting will kick things off!



倉本美津留 Mitsuru Kuramoto

1959年広島生まれ、大阪育ち。放送作家。『ダウンタウンDX』NHK Eテレこども番組『シャキーン!』などのテレビ番組を手掛ける。これまでの仕事に『ダウンタウンのごっつええ感じ』『M-1グランプリ』『たけしの万物創世紀』『伊東家の食卓』ほか。ミュージシャンとしての顔も持つ。空気公団や峯田和伸、タレントのYOUなど、コラボレーションの楽曲多数。

Born in 1959 in Hiroshima and raised in Osaka, Kuramoto is a broadcast writer. The television programs he has worked on include *Downtown DX*, *Shakiin!* (an NHK Educational channel’s program for children), *Downtown no gottsu ee kanji*, *M-1 guranpri*, *Takeshi no banbutsu soseiki*, and *Itoke no shokutaku*. Kuramoto, as a musician, has collaborated with many artists such as Kukikodan, Kazunobu Mineta and a TV talent such as YOU.

坂口修一郎 Shuichiro Sakaguchi

1971年鹿児島生まれ。ミュージシャン。無国籍楽団ダブル・フェイスのトランペット、トロンボーン、パーカッションを担当。2010年より、鹿児島発野外フェスティバル、『グッドネイパーズ・ジャンボリー』実行委員会代表を務める。廃校となった小学校を舞台に、自然のなかでライブやワークショップが楽しめる同イベントは、県外からも多くの人が集まる。

Born in 1971 in Kagoshima, Sakaguchi is a musician who plays trumpet, trombone, and percussion with Double Famous. Since 2010, he has served as executive director of the Kagoshima-based Good Neighbors Jamboree, an outdoor festival of live music and workshops held in a natural setting on the site of a former elementary school that draws many visitors from outside the prefecture.

中村佑子 Yuko Nakamura

1977年東京生まれ。映像作家。塚本晋也監督の助監督を経て、テレビマンユニオン参加。代表作にNHK BSP『幻の東京計画 首都にあり得た3つの夢』、NHK Eテレ『建築は知っている ランドマークから見た戦後70年』など。現在、『はじまりの記憶 杉本博司』に次ぐ、映画監督として2作目となる『あえかなる部屋 内藤礼と、光たち』が公開中。aekanaru-movie.com

Born in 1977 in Tokyo, Nakamura is a visual artist. Having formerly worked with Shinya Tsukamoto as an assistant director, she is now part of TV Man Union, Inc. Her projects include *Maboroshi no Tokyo keikaku shuto ni arieta mittsu no yume* for NHK BS Premium and *Kenchiku wa shitte iru landomaku kara mita sengo nanajunen* for the NHK Educational channel. Her second directorial work after *Hajimarinio kioku Sugimoto Hiroshi*, *Aekanaru heya Naito Rei to hikeritachi* is now in theaters.